

ベランダバードウォッチ 2019 年夏の報告書

バードリサーチ・日本野鳥の会栃木県支部

今年も市街地上空をヒヨドリの群れが南を目指して通過する季節になりました。2019年の春から夏は、4月前半には寒気の影響で関東の一部では降雪が記録されるなど気温の低い日が続きました。一方で、5月中下旬には東日本では真夏並みの高温の晴天が記録され、6月から7月は東日本などでは梅雨が長く続きました。このような寒暖の差が激しい気温や雨の多い気象下では、身近な鳥たちの生息や子育てに多少とも何らかの影響があったのでしょうか。以下に、2019年の春から夏の調査状況や主要な種の記録状況を報告するとともに、カッコウとホトトギスの記録状況について宿主のオナガやウグイスの記録状況を交えてまとめてみました。

調査状況

2019年4月から8月末までに、合計64名によって家での調査37か所、家の周りの調査58か所で行われました(図1)。家の周りの調査地数は、直近の3年間では最多となりましたが、家での調査は18年夏よりだいぶ減少してしまいました。家の周りの調査が増えた背景には、一人で複数の調査地で観察された方が増えたことも理由のひとつです。



図1. 最近3シーズンの地域別調査地数の比較

ベランダバードウォッチは、身近な鳥の生息状況の長期的なモニタリングを目的としています。そのため、同じ調査地で継続した調査が必要

です。そこで、昨年と今年の繁殖期の調査地の継続状況を調べてみました(図2)。家での調査は、昨年の44か

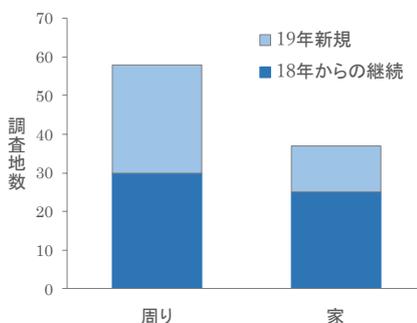


図2. 繁殖期における2018年と2019年の調査継続の状況

所のうち今年も継続して調査された調査地が25か所、今年に新たに調査されたのが12か所で7か所の減少となりました。一方、家の周りの調査は、昨年の49か所のうち30か所で継続され、さらに新たに28か所で調査され、8か所の増加でした。このように、家の周りの調査が多いのは、おそらく、家での調査より多様な環境が含まれるため、多くの鳥が記録され調査をしても楽しいためかもしれません。あるいは、家の庭やベランダからの観察は隣近所の目もあり、調査しにくいこともあるかもしれません。同じ調査を長年にわたって続けることは、労力的に大変かもしれません。しかし、少しでも多くの方が参加していただくことで、よりはっきりした鳥たちの生息状況の傾向を知ることができると思われます。ぜひ、今後とも継続した参加をお願いいたします。

記録種と記録率

繁殖期の家での調査で5月10日から7月10日に記録された種数は合計60種で、調査期間の長い家の周りの調査が124種でした(付表1)。調査範囲が狭い家での調査ですが、調査地が北海道から九州まで及んでいることから、スズメやツバメ、カラス類のような市街地に生息する種のほか、シジュウカラ類や猛禽類、サギ類、セキレイ類なども記録されました。さらに、家の周りの調査では、カモ類やシギ・チドリ類、カモメ類などの水辺の種や森林性の種など多くの種が記録されました。

両調査の記録率上位種をみると、両調査とも記録率の順位こそ多少違うものの、その顔触れはほぼ同じです(表1)。家での調査の9位以下の記録率が家の周りの同じ順位より著しく低いのは、調査範囲が狭く調査回

表1. 2019年繁殖期の調査の記録率上位15種とその記録率

家での調査			家の周りの調査		
No.	記録種	記録率	記録種	記録率	
1	スズメ	0.80	スズメ	0.91	
2	ムクドリ	0.63	ヒヨドリ	0.85	
3	ヒヨドリ	0.61	キジバト	0.80	
4	ハシボソガラス	0.55	ハシボソガラス	0.73	
5	キジバト	0.47	ムクドリ	0.66	
6	シジュウカラ	0.46	シジュウカラ	0.64	
7	ツバメ	0.40	ハシボソガラス	0.63	
8	ハシボソガラス	0.40	ツバメ	0.63	
9	メジロ	0.27	カワラヒワ	0.50	
10	コゲラ	0.25	ハクセキレイ	0.45	
11	カワラヒワ	0.22	メジロ	0.44	
12	ドバト	0.20	ドバト	0.40	
13	ウグイス	0.20	ウグイス	0.35	
14	ハクセキレイ	0.16	カルガモ	0.34	
15	インヒヨドリ	0.15	オナガ	0.32	

数も少ないために、スズメやヒヨドリなど一部の種を除くと記録される回数が少ないためと考えられます。

特定種の今繁殖期の記録状況

・ツバメ

家の周りの調査と家での調査におけるツバメの記録状況を、過去のデータと比べてみました。調査地が異なると記録率も変わるため、ここでは2年間あるいは3年間とも同じように調査が実施された関東から九州の17か所の調査地を対象にしました。

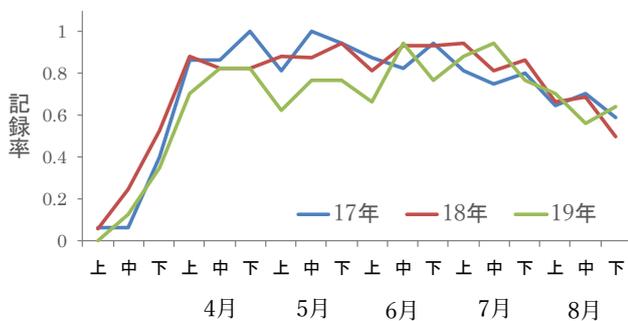


図3. 家の周りの調査における3シーズンのツバメの記録率の季節変動の比較

家の周りの調査の2017年から2019年の3年間の、ツバメの記録率は、どの年も多少ばらつきがあるものの、2019年の春先の記録率は過去2年に比べて低い傾向がありました(図3)。また、特に5月上旬から6月上旬の記録率が、過去2年と比べて顕著に低かったのが特徴でした。特に2018年では記録率が0.81-0.94だったのが、2019年では0.62-0.76でした。

次に、個体数をみてみました。家の周りの調査では個体数は、6ランクの概数で報告します。しかし、この中

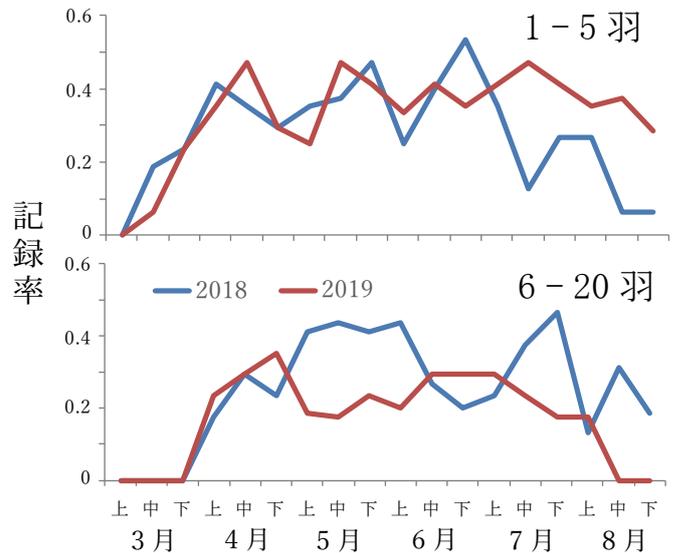


図4. 家の周りの調査による2シーズンのツバメの個体数ランク別の季節変動の比較

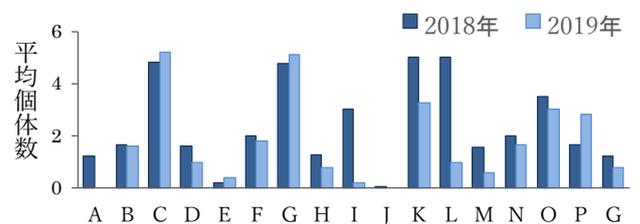


図5. 同一調査地における2018年と2019年の家での調査でのツバメの平均記録個体数の比較

には個体数を表さない「時々」が含まれ、また、記録の少ない大きな群れのランクもあります。そこで、今回は1-2羽と3-5羽を統合した1-5羽と6-20羽の2つのランクの旬ごとの記録率を2018年と2019年で比較しました(図4)。すると、1-5羽のランクには、繁殖が終盤を除くとはっきりした傾向はみられませんでした。6-20羽のランクは、記録率と同様に5月上旬から6月上旬の2019年の記録率が2018年より著しく低かったのです。2017年も、ばらつきがあるものの、同じ時期の記録率は2019年より高いことがわかりました。この季節はおおむね第1回目の繁殖の巣立ちヒナが飛び回る時期です。とすると、4月の低温で繁殖時期が遅れたり、繁殖成績が悪く、巣立ちしたヒナが少なかったりしたのかもしれない。

さらに、家での調査における調査1回あたりの平均個体数を2018年と2019年で比較してみました。調査地によって環境が変わることが予想されたため、同じ調査地同士で比べてみました。すると、軽微な違いの調査地も多いものの、2018年の方が2019年より記録個体数が多いことがわかりました(図5)。この中には平

均で1羽以上の差がある調査地が5か所ありました。したがって、家の周りの調査、家での調査とも2019年のツバメの記録率や個体数は、2018年より少なかったと言えます。ツバメは飛翔中の昆虫類が主食ですので、春先の気象状況が昆虫類の生育に影響したのかもしれない。ただ、今回得られた2019年の結果が偶然なのかどうかを検証するためには、来年も継続して調査し、比較する必要があります。

・カッコウとホトトギスと宿主の記録状況

表1の家の周りの調査の記録率上位種を見ると、オナガ(15位)とウグイス(13位)が入っています。これらの種はそれぞれカッコウとホトトギスの代表的な宿主です。そこで、カッコウ類の市街地周辺の生息状況に興味を持ち調べてみました。ちなみに、19年繁殖期の家の周りの調査で記録されたカッコウとホトトギスの記録回数は、それぞれ22回と25回であり違いがありません。

カッコウ類が飛来する2019年5月10日から8月には、オナガは19か所の調査地で記録されました(図6)。これらの調査地は神奈川県、東京都、千葉県、埼玉県、栃木県の関東地方と北陸地方の富山県でした。一方、カッコウが記録されたのは東京都の3か所と栃木県の2か所だけでした。宿主であるオナガが19か所で記録されたのに、カッコウが記録された調査地がわずか5か所と少なかったのは、少し意外でした。航空写真をみると、カッコウが記録された調査地と記録されなかった調査地の緑地の多さに大きな違いはないようでした。

ウグイスは、関東から九州と北海道の合計18の調査地で記録され(図7)、オナガに比べて生息分布が広いことが改めてわかりました。しかし、ウグイスはオナガと違い関東では神奈川県と東京都、栃木県の調査地だけで記録されました。ウグイスはおもにササ藪で営巣するため、住宅密集地には営巣環境が少ないためかもしれません。ウグイスを宿主にするホトトギスは、関東から九州の広範囲にわたった12か所の調査地で記録されました。

宿主が記録された調査地数は、オナガとウグイスでほとんど同じなのに、カッコウとホトトギスの記録地数は2倍以上違っていました。このような両種の記録地の違いは、宿主の生息状況のほかに、緑地の孤立化や

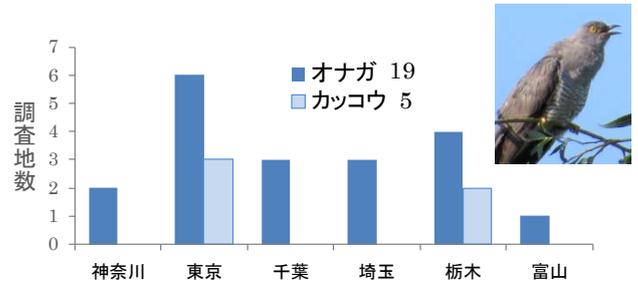


図6. 2019年家の周りの調査によるカッコウとオナガの記録状況

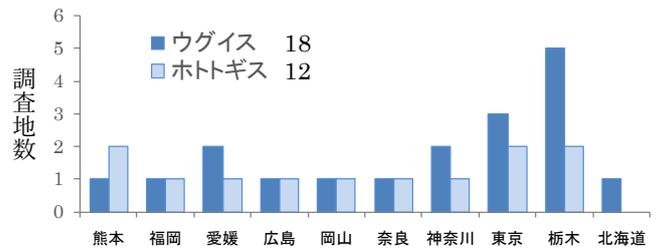


図7. 2019年の家の周りの調査におけるホトトギスとウグイスの記録状況

植生、食物量、さらにはそれぞれの種の行動圏の広さなども関係しているものと考えられます。さらに、現在の日本における両種の生息状況の現状も関係しているのかもしれない。宿主も含めカッコウとホトトギスの市街地周辺の生息状況の変化が気になります。

最後に

以上のように繁殖期の調査から、今春のツバメの記録状況は昨年や一昨年の同じ時期とやや違うことが示唆されました。皆さんの調査地では如何だったでしょうか。今回、報告した内容をよりはっきりさせるためにも来年以降の調査が重要になります。来シーズンの天候の状態と記録状況を解析し、今年や昨年などと比較することでさらに興味深い関係がわかってくるものと思われます。また、これまでのベランダバードウォッチのまとめでは、記録率が低いことからカッコウやホトトギスにほとんど目を向けてきませんでした。しかし、これらの種の記録地は少ないものの種によって違っていることがわかりました。今後、さらに調査地が増えることでもう少しはっきりした違いがわかるかもしれません。

2019年夏の調査では、家の周りの調査地が昨年より増加した一方で、家での調査は減少しました。市街地周辺が調査対象であるベランダバードウォッチは、美しい鳥や珍しい鳥の出現に欠け、魅力ある調査ではない

のかもしれませんが。しかし、同じ場所で同じ方法で調査を続けデータを集約することで、上述したようなツバメやカッコウ類のように新たな発見があるかもしれません。ぜひ、今後とも調査に参加していただけたら嬉しい限りです。

今年は10月に入っても気温の高い日が続いていますが、今年も秋から冬へと季節が進んでいきます。秋冬期は、身近な公園や住宅地でも夏より多くの種が生息するとともに、鳥たちの生息状況が著しく変動します。今年の冬は鳥たちが多いのでしょうか。引き続き冬の調査もよろしく願いいたします。

末尾ながら、以下に2019年の繁殖期の調査にご参加いただきました方々のお名前を記してお礼に替えさせていただきます。

秋元玲子, ea, 五十嵐勉, 石坂あや子, 石口富實枝, 石田健, 石原渉, 入船憲一, 植田睦之, 瓜田英司, 大井智弘, 大出水幹男, 大下陽平, 大塚啓子, 小川泰生, 沖田絵麻, 勝野光昭, 加藤ななえ, 加藤美奈子, 川畑紘, 久保賢一, 黒沢令子, 小荷田行男, 小林俊子, 小堀脩男, 斉藤美和, 坂田樹美, 笹倉千江花, 佐藤司, 佐藤留美子, 白石健一, 白石ひとみ, 鈴木梨緒, 須田由美, 大門明美・大門聖, 高橋佳子, 高山裕子, 武居住子, 竹内敦子, 武谷由紀子, 辰巳文吾, 田中利彦, 塚島律子, 殿山裕子, 中井幸治郎, 中島慶二, 長嶋宏之, 中村健三, 西川光一, 丹羽和夫, 広友詞子, 藤川未来, 藤原淳子, 古川紀美子, 松平晶子, 三田長久, 宮崎朋子, 村尾雅宏, 安田耕治, 山口力弘, 山崎優佑, 横山由里子, 吉中康展, 吉邨隆資, 渡邊ケイコの各氏 (アルファベット順)。

とりまとめ：平野敏明

付表1. 2019年ペランダバードウォッチ繁殖期の調査による記録種一覧

No.	種	家	周り	No.	種	家	周り	No.	種	家	周り
1	キジ	○	○	44	トビ	○	○	87	ゴジュウカラ		○
2	オカヨシガモ		○	45	ツミ	○	○	88	ミンサザイ		○
3	ヨシガモ		○	46	ハイタカ		○	89	ギンムクドリ		○
4	ヒドリガモ		○	47	オオタカ	○	○	90	ムクドリ	○	○
5	マガモ		○	48	サンバ		○	91	コムクドリ	○	○
6	カルガモ	○	○	49	ノスリ	○	○	92	トラツグミ	○	
7	ハシビロガモ		○	50	フクロウ	○		93	シロハラ		○
8	オナガガモ		○	51	アオバズク		○	94	アカハラ	○	○
9	コガモ		○	52	カワセミ	○	○	95	ツグミ		○
10	ホシハジロ		○	53	コゲラ	○	○	96	コマドリ		○
11	キンクロハジロ		○	54	アカゲラ	○	○	97	ジョウビタキ		○
12	スズガモ		○	55	アオゲラ	○	○	98	イソヒヨドリ	○	○
13	カイツブリ		○	56	チョウゲンボウ	○	○	99	サメビタキ		○
14	キジバト	○	○	57	ハヤブサ		○	100	コサメビタキ		○
15	アオバト		○	58	サンショウクイ		○	101	キビタキ	○	○
16	カワウ	○	○	59	サンコウチョウ	○	○	102	オオルリ		○
17	ゴイサギ		○	60	モズ	○	○	103	ニューナイスズメ		○
18	ササゴイ		○	61	カケス	○	○	104	スズメ	○	○
19	アオサギ	○	○	62	オナガ	○	○	105	キセキレイ	○	○
20	ダイサギ	○	○	63	ハシボソガラス	○	○	106	ハクセキレイ	○	○
21	チュウサギ		○	64	ハシブトガラス	○	○	107	セグロセキレイ	○	○
22	コサギ	○	○	65	クイタダキ		○	108	ビンズイ	○	○
23	クイナ		○	66	ハシブトガラ		○	109	タヒバリ		○
24	ヒクイナ		○	67	コガラ		○	110	アトリ		○
25	バン		○	68	ヤマガラ	○	○	111	カララヒワ	○	○
26	オオバン		○	69	ヒガラ	○	○	112	マヒワ		○
27	ホトギス	○	○	70	シジュウカラ	○	○	113	ベニマシコ		○
28	ツツドリ	○	○	71	ヒバリ	○	○	114	イスカ		○
29	カッコウ		○	72	ショウドウツバメ		○	115	シメ	○	○
30	ケリ		○	73	ツバメ	○	○	116	イカル	○	○
31	ムナグロ		○	74	コシアカツバメ	○	○	117	ホオジロ	○	○
32	イカルチドリ		○	75	イワツバメ	○	○	118	ホオアカ		○
33	コチドリ		○	76	ヒヨドリ	○	○	119	カシラダカ		○
34	タシギ		○	77	ウグイス	○	○	120	ミヤマホオジロ		○
35	チュウシャクシギ		○	78	ヤブサメ		○	121	アオジ	○	○
36	アオアシシギ		○	79	エナガ	○	○	122	オオジュリン		○
37	キアシシギ		○	80	オオムシクイ	○	○	123	コジュケイ	○	○
38	イソシギ		○	81	メボソムシクイ	○		124	ドバト	○	○
39	ユリカモメ		○	82	エゾムシクイ		○	125	ホンセイインコ	○	○
40	セグロカモメ		○	83	センダイムシクイ	○	○	126	ガビチョウ	○	○
41	オオセグロカモメ		○	84	メジロ	○	○	127	ハッカチョウ		○
42	コアジサシ		○	85	オオヨシキリ		○				
43	ミサゴ	○	○	86	セッカ		○			60	124